

Network & Footwork

有限会社メディアハウスエイアンドエス Vol.36



本年もよろしくお願いたします

仕事柄、企業や行政などで作られているさまざまな対外・対内資料を目にする機会がある。それらはいずれも言いたいことが伝わらないというものだ。そのうちの多くは、同じような専門知識を持つ相手であればきちんと伝わるが、自分と知識や分野が異なる人を相手にすると、うまく伝わらないという課題を抱えている。

そうした資料を確認すると、財務の諸表や設計図、各種の分析のための図表、制度の説明といった、それぞれの領域で、こういう記述でやりとりするのが一般的であろうと思われる表現が並んでいる。こうした表現で同じような知識のある人を相手にすれば理解してもらうことができる。しかし、読み方見方を知らない人を相手にすると、理解する側にとっても、説明する側にとっても伝わる説明が難しくなる。

こうしたことを経験しながら、それでも専門的な表現を使う理由は、説明する人がその専門的な表現こそ「事実を忠実に表現している正しい表現」だと思っているからではないだろうか。

しかし、そうした表現方法は「事実を忠実に表現している」わけでも、つねに「正しい」わけでもなく、特定の目的のために「ふさわしい」表現に過ぎない。

たとえば会計の数字は、事業の活動を把握するために、そこに携わる人々の営みを数字で表現したもので

あり、設計図面は、設計方法を整理したり共有したりするために、作ろうとする対象の一部を切り取って表現したものである。制度を説明するための文章や図表、分析のためのツールにも同じことがあてはまる。

そう考えると、知識の違う相手に伝える場合には、伝えるために「ふさわしい」表現に変えていかなければならないことに気づく。

つまりそれぞれの専門領域で知識や経験、見識を掘り下げたら、その掘り下げたところで手に入れたものを持って、掘り下げる前にいた地表まで戻り、そこにいるさまざまな経験や知識を持つ人にわかるように、相手に応じ、その相手のものの見方を考慮して渡すということが必要とされる。

このことを去年一年間考えてきた。今年はさらに掘り下げ、多くの人に役に立つようにして伝えていこうと思っている。

飯田英明



謹賀新年
2020

■高橋の取材ノートから

◎昨年の仕事を振り返る

昨年（2019年）、足かけ二年間にわたった社史と創業者伝の二点の制作のお手伝いをした。

一社は110周年を迎えた電力、通信、建設といった社会基盤を支える資材を製造する会社である。

1909（明治42）年の創業から110年という長い時間の間には企業努力とは関係なく、社会の変動に翻弄されることがいくつかもあった。そのうちのひとつは関東大震災で、1923（大正12）年に当時、東京の下町にあった同社の本社工場は焼失してしまう。さらに1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲で本社工場はふたたび全焼する。

その都度、全社一丸となって再建に奔走するのだが、そのときに何が起り、どう取り組んだのかという貴重な体験を知ることができたのは、当時の経営者が遺した手記や戦後の復興から高度経済成長期を支えたOBの方々のお話があったからだ。それなくては社史を完成することはできなかった。

もう一社は、一度目の東京オリンピック開催を前にして社会に高揚感と活気が溢れていた1961（昭和36）年、24歳で15万円の中古トラック一台から開業し、50周年を迎えた食品物流を手がける運送業の創業者のあゆみの聞き語りをまとめた。

食品物流は早朝や夜間勤務のため人件費がかさみ、冷凍車のコストすべてをそのまま運賃に転化できるわけではないという理由から大手が参入してこない。そこに「人は一年365日食事をする、世間が休むお盆

やお正月にも仕事が途切れることなくある」という点に注目し、特化する。そして利幅のけっして大きくない仕事をコツコツと積み重ねるようになり遂げることで、スーパーマーケットやコンビニというその時代の流通の成長とともに業績を拡大させていく。

またその過程でトラックメーカーの開発陣に現場の声を伝え、ときには運送のための工夫や開発までに関わり、その結果、現在私たちが目にする輸送用トラックになっていく話もたいへん興味深いものであった。

◎地域に根ざしながら、グローバル展開に乗り出す中小企業

昨年、新たに出会った二つの企業を紹介したい。いずれも長年にわたり広報をお手伝いさせて頂いている経営コンサルティンググループ、日本創造経営協会の取材がご縁となった。

一社は1941（昭和16）年に創業し、現在従業員数十名の大和合金株式会社。同社は、この分野の中小企業には珍しく特殊銅合金の一貫生産体制を行い、海外を含む自動車や航空機メーカーから高い技術力と経験を評価されている。

また大企業でも終身雇用制が崩れ、新入社員から定年までひとつの会社で働く人の数が減っていくなかで、同社は数組の親子・兄弟が働くなど、家族的つながりを重視している。その取り組みなどが認められ、昨年「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」の中小企業庁長官賞を受賞した。三代目となる萩野源次郎現社長は、2041年の創業100年を三世代の社員で祝いたいと夢を語る。

同社が大切にしているのは会社の枠を越え地域にも及ぶ。工場のある埼玉県入間郡三芳町で、地元の人々が参加する「みよしの森音楽会」の開催は昨年で10回目を数えた。

もう一社は群馬県沼田市の株式会社テクノアウターで大型店舗・倉庫といった建物の屋根や外壁工事を手がけている。昨年12月上旬に新築したばかりの本社を訪ね、桑原敏彦会長からお話をうかがう機会を得た。

桑原会長は学校卒業後に会計事務所につとめ、やがて親の会社に入社した。しばらくして莫大な借金問題を抱えていることを理解し、新工法の特許の取得などによって業績をあげながら、十数年かけ借金問題の解消に取り組んだ。借金問題にめどがつくと、今度は採用の難しさに直面する。そのため自社に作った技術訓練センターをもとに、2016（平成28）年4月地元沼田市の廃校となった小学校を活用し、一般社団法人テクノアカデミーを設立した。桑原会長は自ら校長となり、教壇にも立つ。アカデミーは国会議員や海外からの視察も多数あり、昨年はドローン技術コースを新設した。

桑原会長は、こうした経験を生かして、アカデミーの海外への展開へ夢を広げている。

高橋明紀代

（日本ペンクラブ会員）

有限会社メディアハウスエイアンドエス
〒108-0071
東京都港区白金台3丁目16番10-709号
PHONE (03) 3449-0785
FAX (03) 3449-0736
m-hmail@nifty.com
<http://www.m-h.co.jp/>